

# 古代語彙における併存する同(類)義語

—— 目・マナコ型の東西分布 ——

安 部 清 哉

- 一、はじめに——併存と東西対立と
  - 二、目とマナコ
  - 三、言語地図の解釈
  - 四、文献資料における使われ方
  - 五、近隣諸語との関係
  - 六、言語地図・文献資料等の対照による解釈
  - 七、「東西対立分布西日本拡大型」の成立過程
- 結び

## 一 はじめに——併存と東西対立と

方言分布の典型的パターンの一つとして東西対立分布としてまとめられるような一群がある。平面的共時的には東西対立型としてまとめられるそれらの中にも様々なタイプのもがあり、従来は共時的観点から分類されているが、<sup>(1)</sup>通時的にとらえる場合、その境界線

の位置が方言分布の成立過程の相違を示す指標として重要な意味をもってくる。境界線が、糸魚川・浜名湖線の付近を通るものをその典型として(1)東西対立中央拮抗型と呼ぶとすると、ずっと東寄りの関東付近を通る(2)西日本(語形)優勢(拡大)型や、関西や中国地方を通る(3)東日本(語形)優勢(拡大)型がある。これらはその境界線の成立時期も異なっているものと考えられる。

それぞれの境界線がいつどのようにして成立したものであるかは、方言分布全体の成立過程とかかわることが<sup>(2)</sup>あるが、いま、これらの東西対立型に限定してみていくことにすると、東と西各々の語形が上代あるいは中古から共に現れている場合が少なくない。その最も典型的なものとしては「いる」と「おる」の対立がある。東西の語形間の文献資料での時代的開きが大きければ、それらの東西対立も歴史的前後関係として考えることができようが、古代にお

いて既に併存状態にある場合、単純にその前後関係を決めることが難しい。文献資料における併存状態を詳細に検討し、各語の意味・用法上の差異（時代差・地域差・位相差・文体差など）を可能な限り明らかにしていくことが必要となる。

東西対立型のうち西日本優勢型の一つに「目・マナコ」の例がある。文献資料での従来の解釈が半ば定説化していることもあって、文献例としても言語地図との対照としてもあまり問題にされることなくあったが、改めてそれらの検討を行ってみると、いくつかの新たな問題が浮かび上がってくる。マナコは近代までメと併存しているが、文献における併存と方言における対立という相矛盾するように見える現象には、両資料の位相の隔たりや方言分布の成立過程などの根本的問題が、その背景にあると考えられる。本稿では「目・マナコ」を例に言語地理学と文献国語史の対照によって東西対立分布の成立過程を考えてみることにしたい。

## 二 目とマナコ

メとマナコの関係について、従来指摘されている点は、次の二点である。ひとつは、メはメのいわゆる被覆形であり、マナコは「目之子」であって本来黒目を指すという点である。いまひとつは、平安時代においてメは和文特有語、マナコは漢文訓読特有語と見なす

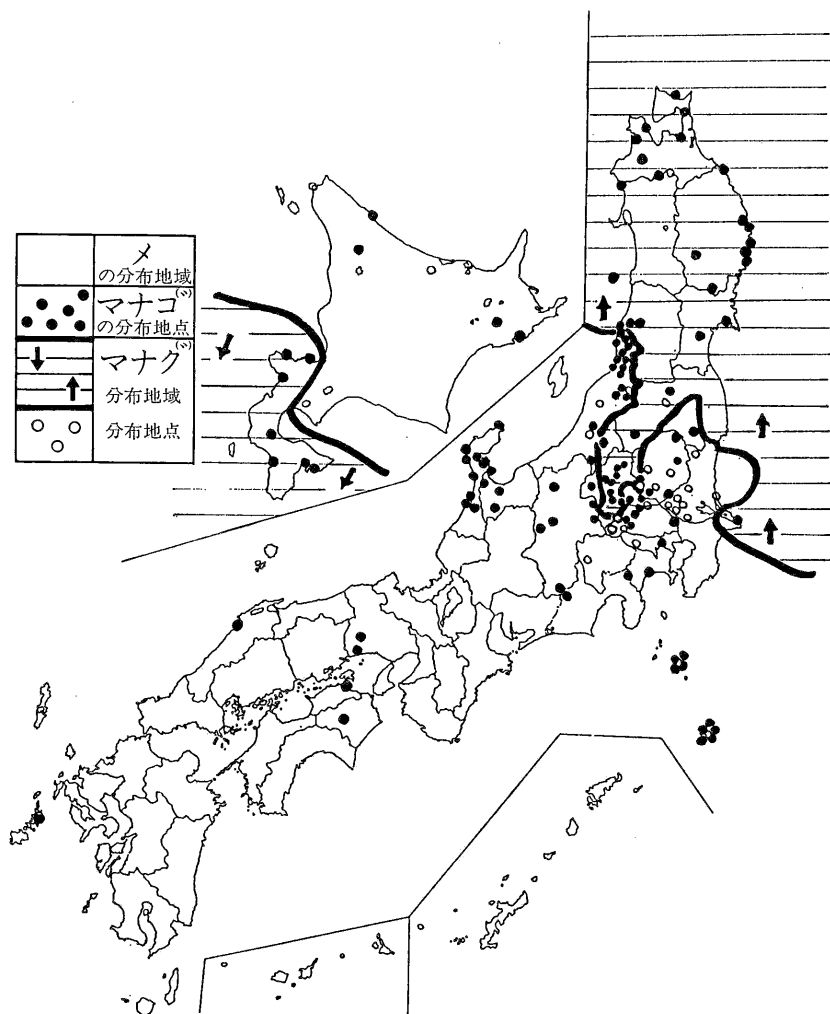
ことができるという点である。後者については、「一般に訓読特有語の方が、和文訓読語（注、和文特有語の誤か）よりも、古い形を残してゐると考へられる」とされているが、メとマナコの新旧については充分明らかになっていない。

メとマナコを、方言分布・文献資料などで見ていくと、その歴史的前後関係や意味差・位相差において従来の指摘とはやや異なった面が認められる。以下では、それらの資料を順次取り上げ考察を進めることにする。

## 三 言語地図による解釈

まず、国立国語研究所編『日本言語地図3』（以下、LAJと略す）第110図「目」を資料として、目を表す方言の全国分布を見ることにしたい。質問文は「これを何と言いますか。この、物を見るものです。」というもので、人の顔の絵が添えられている。主要語形はメとマナコ・マナクとの2類に大きく分けられる。さらに、マナコとマナクは類似する語形であるが、その分布に有意な差が認められるので、この2種を分けて考える。また、マナコ・マナクとも、第3音節の濁音語形も見られるが、それらは「すべていわゆるKの有声化地帯（28図など参照）に含まれる。」（LAJ解説、以下解説とのみ記す）ので、マナコ・マナクで代表させることにする。LA

図 1 <目> の言語地図



国立国語研究所編『日本言語地図』第110図により安部清哉作製。

Jのメ・マナコ・マナクの3語形の分布を簡略に図示したのが図1である。

メは関東・中部以西に分布があり(岩手・宮城にも若干分布する)、マナクは関東東北東部から東北さらに北海道半島部に及んでいる。本州のメとマナクとの分布境界線は、L A J第102図「旋毛」におけるマキメとツムジとの東日本での分布境界線にきわめて類似する。<sup>(7)</sup> マナコの分布地点はこれらとはまた異なった分布を見せ、全国に互って広く散在し、特にメとマナクとの境界地帯に集中する傾向が認められる。(八丈島・五島列島のマナコの単独回答は注意される)。

まず、語形の類似するマナコ・マナクをいっしょにし(両形を合わせて考えるとときは、以下マナーと表記する)、メと対比させてみると、マナコは九州・四国・中国にまで及んでおり、マナクと共に東北を占領しているところから見て、「おそらく、一時代前に調査すれば、マナコの類は全国的にもうすこし多く、マナクの類は現在よりさらに広い領域に現われたものではあるまいか。」(解説)と推察される。また、メが東北にあまり侵入していない点(併用処理されてはいるが)から見て、マナーの方がメよりも古い語形であり、マナーがあったところに西日本でメが広がり、さらに東日本へ広がって、マナーを東日本北部へ押しやったものと考えられる。

次に、マナコとマナクの関係について見ると、従来一般にはマナ

クはマナコの変化した形と説かれてきた(例えば『日本国語大辞典』など)。オ段からウ段への母音の変化は、歴史的にも多く見られる現象である。<sup>(8)</sup> しかしながら、「両者の語形の類似にもかかわらず、分布の観点から——たとえば、マナクはマナコの変化というように——すぐに結びつけることはできない」(解説)面がある。それは分布上、「下北半島などに限れば MANAKU>MANAKO の変化も考えられる」(解説)ことが指摘されているほかに、次のような特徴が認められるからである。マナコの分布を見ると、北陸や伊豆諸島を含め東日本東部に多く、あたかもメによって周辺部に押しやられてつたように見られる(西日本側は海に沈んでしまったと考えられる)。また、マナコの分布地点はメが独占している地域(西日本・中部地方)か、メがマナクの領域にかなり侵入している地域(関東・北陸)に限られる傾向が認められ、特にメとマナクの接触する地帯(図1の境界線付近)のメ側に集中して分布していることがわかる。東北地方にもマナコの分布は見られたが、それらは三陸沿岸や日本海沿岸などに多く、海運によってもたらされたものである可能性が高い。また、マナクが特に東北地方に単独回答の広い分布を持つのに対し、マナコは単独回答の分布地域を持たず、そのほとんどがメとの併用回答になっている。これらの分布上の特徴は、マナクの領域にメが侵入・拡大するに伴い、マナクの語形がマナコ

に変化していったかのような様相を呈している。つまり、分布からはマナク $\downarrow$ へ<sup>マナク</sup>メ $\downarrow$ へ<sup>マナコ</sup>メ $\downarrow$ メという変遷を読み取ることができる。

用法の面から分布を見ると、東北地方はマナクの独占地帯であり、しかも分布から見てもこのマナーの方が古いと考えられるから、東北地方のマナクはメが広がる以前から目全体を表す語として使われていたことになる。このマナクがマナコの音訛であるなら、メが目全体を表しマナコは本来黒目の方を表したとする従来

の解釈と大きくずれることになる。

ところで、マナコのコは「子」と解釈されているが、形態上コをこのように解釈できることからみれば、マナクのクはやはりコの音訛と考えるのが穏当のようである。しかしまた一方、先に地図から読み取った変遷に沿って解釈を進めるなら、マナクの領域にメが侵入しマナクとメとの併用状態になったため、語源の分からなくなつたマナクに「目の子」という語源俗解が加えられて語形変化し、メは目全体マナコは黒目という使い分けを生み出したという可能性も全く考えられないように思われる。いずれにしても、マナクの分布地点は、東北地方に限定されているわけではなく関東にもかなり多く見られること、また、マナコはメの周辺部やメとマナクとの境界付近に集中することを注意深く解釈する必要があるように思

われる。

また、「能登半島付近には、MANAKOの方が下品であるという地点がいくつかあった。」(解説)というが、次節で見のように文献資料ではマナコがマイナス評価語として使われているのと共通する点であり注意される。マナクの分布についてはそのような報告は記されていない。

以上、言語地図におけるメ・マナコ・マナクを見てきたが、それらは次のようにまとめられよう。

1、メに比してマナコ・マナクの方が古い。

2、東北地方の分布から見て特にマナクは黒目に限定されずに使われていたと考えられる。

3、分布の特徴から見て、マナク $\downarrow$ へ<sup>マナク</sup>メ $\downarrow$ へ<sup>マナコ</sup>メ $\downarrow$ メという変遷があったとも考えることができる。

3の推定を裏付けるためにはマナクが西日本の周辺部にも現れることが期待される。言語地図には今見てきたように現れていないが、次に見る文献資料の方には九州方言としてマナクの例が現れる。

#### 四 文献資料における使われ方

ここでは文献資料におけるメ・マナコ・マナク及びマナコの複合語マナコキの用例を、特に用法上の差が顕著な上代・中古・中世に

限って見ていくことにする。マ(目)の複合語は他にも多く見られるが(マナジリ・マツゲ・マブタなど)、言語地図との対照上目を表す語形に限定し、マナコの用例を補うためにその複合語マナコキを加えることにする。

まずメについて見ると、上代から現代まで目を表す語形として広く一般的に使われ、位相差・文体差など用法上の特徴は認められない。訓点資料には比較的少ないが、漢字「目」に対する読みとしてメが定着していたという事情も考慮される。『万葉集』でも他の語形は使われず、例えば、

○音に聞き目にはいまだ見ず佐用姑が領巾<sup>おれ</sup>振りきとふ君松浦山  
(五・883、日本古典文学大系(以下、大系とのみ記す))

のようにメだけが使われている。メは上代から現代まで何ら制約無く使われていたと考えられる。以下では他の語形の用法を検討し、メとどのような点で相違が見られるか比較していくことにする。

### ●マナコ

メに次いで用例が比較的多く得られたのがマナコである。マナコは漢文訓読特有語でメは和文特有語であるとされている(第二節参照)。単に用例数の比較でいうならば、後に上げるようにマナコは仮名書き散文資料にも少なからぬ数を見出すことができる。しかし、メの用例数との比率でいえば、仮名書き散文でのマナコの占める割

合は極めて低く、反対に訓点資料や漢文訓読体の文章の中でそれは比較的高くなっている。それは一方では「目」の字に対する訓みとしてメが定着していたため、訓点資料などではわざわざ訓ずる必要がなかったという事情も反映していると考えられる。しかし、それを考慮しても、右のような用例数の差異および後に見るような仮名書き散文資料中でのマナコの現れ方から見て、メは和文特有語マナコは漢文訓読特有語という対立でとらえられるような面はあったとしておくことには問題はない。そのような文体差のあるメ・マナコであるが、マナコの例を詳しく検討していくと、漢文訓読体の文章の中での用例と仮名書き散文の中での用例とに微妙に異なった面が認められる。以下では、まずマナコの漢文訓読特有語としての用法とその際の意味を確認し、ついでそれとはまた性質を異にするもの一つの面について検討していくことにする。

マナコの語形が最初に確認できるのは、平安初期の石山寺藏『大般若経音義』(信行作)であり、それには、

○眼晴 且頂反昭晴也昭音亡頂反昭晴也 倭言麻那古<sup>(9)</sup>  
と見える(傍線引用者、以下同じ)。「昭晴」は、『広韻』に、

○平声清韻 晴 目珠子也

○上声静韻 晴 昭晴不悦目兒出<sup>ニ</sup>字林<sup>ニ</sup>又音精  
とあり、「晴」が上声で熟合して「不悦目兒」つまり悦ばない顔付き

を表す。また、九世紀半ば頃の加点とされる高山寺藏『彌勒上生經贊』古点の朱筆による初点には、

○睛マナコ<sup>(10)</sup> (参考、「世尊」ノ) 眼一睛マナコ<sup>(11)</sup>

○眼睛マナコ (同右、「世尊」ノ) 眼精マナコ<sup>(12)</sup>

とある。前の『大般若經音義』と共通する「睛」の字義は『大漢和辞典』によれば「一、ひとみ。めだまのしん。眼球の水晶体。二、悦ばぬ目つき。」とある。また、「精」は『説文通訓定聲』(中華書局出版)の注に「字亦作睛」とあるように「睛」とおなじ意をもつ。本那の古辞書にもこれらの漢字にマナコの訓が見られる。

『新撰字鏡』には、

○睛且頂反平昭 睛也万奈古 (天治本卷二8才)

とあり「昭」は頭注、索引でも「昭」とするが『広韻』『篆隸萬象名義』によれば「昭」ととるべきか、また、

○眸亡侯反平目 精万奈古 (同右)

と見える。『倭名類聚抄』(元和本)には、

○眼眼皮 廣雅云眼名五簡反和 名萬奈古 目子也一云瞳童反訓 附 遊仙窟云眼皮師說萬古井 說萬奈古井 同上

とあり、「眼」「瞳」の訓としてあげられ「目子」と注がある。観智院本『類聚名義抄』にはマナコの訓は多く、まず、

○眼五簡反 和ケム (佛中六三)

○睛音淨 不悅視 和生 (佛中六九)

○精音精 和生 (以下略) (法下二九)

の字に見えるほか、「目・眇・瞳・瞼・眸・瞳・瞼・個」にも見える。マナコの訓が多いのに比して、メの訓は「目」に一例見られるのみである。『色葉字類抄』には、

○眼マナコ 眸 又マナシリ 瞳 同 精 同 眼皮 マナコキ (黒川本、中90ウ)

とあるほか、

○瞼マナコ 黒川本、中73ウ

があり、「瞼」は黒い瞳を意味する。

ところで、『大般若經音義』の注に「眇睛」とあり、『類聚名義抄』の「睛」に「不悦視」とあるように漢字「眼睛」「睛」は「悦ばない目付き」を表したようであるが、訓に当てられたマナコの方にはそのようなマイナスの意味が含まれるのであろうか。以下、まず訓点資料の例を確認することにした。

平安末期加点(一〇五八年)とされる高野山龍光院藏『妙法蓮華經』には、

○是の人八百の 功德の殊勝の眼を得む。是(れ)を以(て) 莊嚴するか故(に) 其(の) 目甚(た) 清淨ならむ。

(卷第六 23・10)<sup>(12)</sup>

とあり、「甚(た) 清淨ならむ」とあるから悪い意ではない。興福

寺本『大慈恩寺三藏法師伝』には、

○我（カ）先昆迦葉。五棺已に掩ヒ、千難焚ケナムと將るに屬して、<sup>（13）</sup>「痛」眼、人天に滅ヒ、蒼生救ハル、こと莫（キ）ことを痛ム。（延久承暦頃朱点、卷一、〇一三）

○再び如蓮（ノ）<sup>（14）</sup>「之」目（ニ）長シテ備ナリ、（承徳三年頃点、卷九、三〇四）

とあるが、共にマイナスの意はない。

また、承徳三（一〇九九）年移点の『仏説觀普賢菩薩行法經』には、

○爾（の）時に世尊、而偈を説（き）て言（はく）、

若（し）<sup>（15）</sup>眼根の患有（りて）、障（を）業（する）眼不淨ナラ

とあり、「不淨ナラは」とマイナスの文脈で使われているといえようか。吉水藏『諸佛菩薩本誓願要文集』嘉承三（一一〇八）年点の、

○思想<sup>マコ</sup>遮<sup>レ</sup>眼<sup>マコ</sup>雖<sup>レ</sup>未能<sup>レ</sup>見<sup>（16）</sup>

には、特にマイナス評価はない。「遮眼」とあるところから見て

「眼」は黒目に限らず目全体であろうか。『和泉往来』には、

○佛前寂閑上讀經<sup>セキナリク</sup>之眼<sup>マコ</sup>眩<sup>マコ</sup>而僧意繫縁<sup>（17）</sup>（128）

○曉<sup>アカサ</sup>習學陰<sup>シヨクガクイン</sup>曉<sup>セキナリク</sup>峰雲<sup>セキナリク</sup>紛眼<sup>マコ</sup>（200）

とあり、前者に「眩」という表現があるものの、後者にはマイナス

のニュアンスはない。また、やや時代が降るが、延慶二（一一三〇）九年書写加点の仁和寺藏『奈中吟十首』には、

○憐（レム）可シ<sup>（18）</sup>八九十に（シ）て齒墮<sup>ハ</sup>チて雙<sup>（19）</sup>眸<sup>マコ</sup>の昏（き）ことを「<sup>（20）</sup>右訓クラシ」。

と見え、「昏きこと」とある点ではマイナス評価ととれようか。

総じて見るに、喜ばない顔付き、不快な目付きといった用法は特になく、また、マイナス評価で使われている例はむしろ少ない。それゆえ、少なくとも訓点資料におけるマナコの用法は、漢字「睛」「眼睛」の持つようなマイナス面は持っていないと見ることができ

る。マナコは、右のような訓点資料等のほか、仮名書き散文や漢字仮名交り文などにも現れるが、そのうち次のような例は、この語の漢文訓読特有語としての一面をよく示している。まず、『蜻蛉日記』には、

○導師のはじめにん、「うつたへに、秋の山べをたづねたまふにはあらざりけり。まなこち給ひしところにて、経の心とかせ給はんとにこそありけれ」（康保二年秋、大系）

とあるが、これは法師の会話文中の例である。「まなこち給ひし」とあるところから見て、黒目ではなく単なる目の意で使われていることがわかる。『宇津保物語』の次の2例は大学勸学院西の曹司の



学生藤原季英の言葉に現れる。

○「七さいにて入学してもしは卅一年、それよりいくまなこのぬけ、さうのつきんをにごにさだめて、大がくのまどにひかりほがらかなるあしたは、まなこもかはさずまぼる、ひかりをとどつるゆふべは、くさむらのほたるをあつめ、冬はゆきをつどへて、へやにつどへたること、年かさなりぬ」（祭の使、442—2・3<sup>(18)</sup>）

「いくまなこ」は「生眼」である（大系頭注）。2例ともマイナスの意味はない。大学の学生の言葉であり、『蜻蛉』の法師の例と同様漢文訓読特有語としての使用例である。『字津保物語』の次の一例は地の文であるが、右例の後半部と類似した表現になっている。

○夏はほたるをすとしきふくろにおほくいれて、ふみのうへにきてまどろまず、まいてひなどしろくなれば、まどにむかひて、ひかりのみゆるかぎりよみ、ふゆは雪をまろがして、そがひかりにあてゝ、まなこのうつるまでがくもんをし、（祭の使、432—6）

この例もマイナスの意はないが、夏・冬の対句になっていることからわかるように、中国の故事を下敷きにした漢文調の対句表現である。〔夏〕は晉・南平の車胤が家貧にして燈油なく、夏夜螢を袋に入れてその光によって読書したといういわゆる「車胤盛螢」

〔「車胤聚螢」〕の故事を、また、「冬」は、晉・京兆の孫康が家貧しくして油買うあたわず冬夜雪明りで読書したといういわゆる「孫康映雪」の故事をふまえるものである。）

以下も漢文訓読調の表現の箇所が使われているもの、あるいは漢詩や漢文体の文章の中で使われたものである。『榮華物語』には、

○慈悲の相好はまなこにあり（一八卷五丁2<sup>(19)</sup>）

の他、全部で8例見られたが、マイナス評価の例はない。また、

○桃李顔含怨芙蓉眼浮淚（ウ343）（『法華修法百座聞書抄』<sup>(20)</sup>）

○苦学の寒夜に紅淚襟をうるをし、除目の春朝着天まなこにあり

（『今鏡』むかしがたり<sup>(21)</sup>）

の他、『梁塵秘抄』にも5例見られるが、

○まなこのあひたの青蓮は、したいかい（四大海）をそたたへたる（43<sup>(22)</sup>）

○慈悲のまなこをひらきつつ、のりのみちにそいたまふ（114<sup>(23)</sup>）

のように、仏教的なものばかりでやはりマイナス評価のものはない。後者の例に「まなこをひらき」とあるところから黒目ではなく単に目全体を指すこととれる。

以上のような例も、訓点資料に現れたものと同様この語の漢文訓

読語としての一面を表すものである。また、黒目を指すといわれるが、明らかに黒目を表すと思われる例はなく、むしろ黒目だけでなく目全体を指す例が目立った。意味の面では、少なくとも中古では単に目全体を指しても使っていたものと解釈される。

マナコの漢文訓読特有語としての用例をやや詳しく見るほどに見てきた。それは次に見る一連のマナコと比較し、その違いを明確にするためである。以下、仮名書き散文の中に現れる、これらとは性格を異にするマナコについて見ていくことにしたい。

まず、仮名書きではないが上代の散文での例として、『日本書紀』の次の例がある。

○乃ち三諸岳に登り、大蛇を捉取へて、天皇に示せ奉る。天皇、齋戒したまはず。其の雷虺<sup>ひかりのあめ</sup>、虺<sup>ひかりのあめ</sup>きて、目精赫赫。天皇畏、蔽目不見、(雄略紀七年七月、大系)

「目精」は古辞書などからマナコと訓まれ、諸訓点本・諸注釈マナコと読んでいる。<sup>(23)</sup>確例とはしたいもののこの読みに問題はなからう。いま問題とするは、ここにメとマナコが対照的に使われている点である。マナコは大蛇の目、メは天皇の目であり、恐ろしき動物の目はマナコ、人の目はメという使い分けが認められる。この恐ろしき目、動物の目に使われたマナコがこの一例だけであるなら、資料の性格からいって漢文訓読体の文章での例と同列に扱うべきで

あろう。しかし、以下の例をたどることによって明らかになるように、この二語の対照的な使われ方は各々の語の性格によるものである。

『竹取物語』には2例のマナコがある。

○翁の言ふやう、「御迎へに来む人をば、長き爪して、まなこつかみ潰さん。さが髪をとりて、かなぐり落とさむ。さが尻をかき出で、こゝらの公人に見せて、恥を見せん」と腹立ちをる。

(大系)

どんなに隠し守っても「かの国の人」が来たらどうすることもできないと言うかぐや姫に対する翁の言葉である。かぐや姫をつれ帰りにくる憎き相手に、「腹立ち」ながらかなり強い語調で言い放っている。相手は御迎えに来る「人」ではあるが、その憎むべき敵の潰してしまいたくなるほどのその目にマナコが使われているのを注意したい。もう一つの例は次のものである。

○世界の人の言ひけるは、「大判の大納言は、龍の頸の玉や取ておはしたる」「いな、さもあらず。御まなこ<sup>すゑ</sup>に、杏のやうなる玉をぞ添へていましたる」と言ひければ、「あなたへがた」と言ひけるよりぞ、

大納言が龍の玉も取れず、風病で目を腫らしてしまったのを嘲笑した場面である。このすぐ前に大納言の腫れた目を杏にたとえた同

じ表現があるが、そこではメが使われている。

○からうじて起き上り給へるを見れば、風いと重き人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、杏を二つつけたるやう也。

同じ対象の描写であるのかたやマナコかたやメであるが、両者の違いはつぎの二点にある。一つは前者が嘲笑の対象として表現されているのに対して、後者は単なる書き手の説明描写であり嘲笑・憎悪などの感情が加わっていない点である。マナコは『日本書紀』

では恐怖の対象、『竹取物語』の先の例では敵意、この例は嘲笑の対象であり、いずれもマイナス感情の向けられている対象にマナコが使われている点が共通している。もう一つの相違は、前者が会話文中の例であり、後者が地の文中の例である点である。メは他の作品を見ても会話文・地の文ともに現れるので特に問題はない。注意されるのはこれら一連のマナコが会話文・心内語中に多く現れる点である。さらに加えるにここで「世界の人」つまり世間の人の言葉としてマナコを言わせている点に注意したい。会話文で世間一般の人が使うような言葉であるとするなら、従来言われるような漢文訓読特有語というものの性格と大きく隔たってしまうことになる。この二つの面はどのようにかわっているのであろうか。会話でも使われていたらしいこの語の一面は、次の『土佐日記』の例にもよく現れている。

○かぢとりまたいはく、「ぬさにはみこゝろのいかねば、みふねもゆかぬなり。なほうれしとおもひたぶべきものたいまつりたべ。」といふ。また、いふにしたがひて、「いかがはせん。」とて、「まなこもこそふたつあれ。たゞひとつあるかゞみをたいまつる。」とて、うみにうちはめつればくちをし。(承平五年二月五日、大系)

話者は貫之ととれようか。(萩谷朴『土佐日記全注釈』(角川書店、昭和48・3)では貫之とする。『土佐』のこの例で注意されるのは「まなこもこそふたつあれ」という表現である。同様の表現が『宇津保物語』に2例、『今昔物語集』に1例見られる。『宇津保』の1例は俊蔭の父母の心内語として、

○ちゝは、「まなこだにふたつあり」とおもふほどに、としかげ十六才になる年、(略)めされぬ。ちゝはゝかなしむことさうにたとふべきかたなし。一生にひとりある子なり、(俊蔭、3—2)

とある。貴重な目でさえ二つあるのに、一人しかいない我が子は目よりもなおさら貴重であることを言ったものである。もう一つの例は語句がやや異なるがやはり会話文に現れる。

○かんのおとゞ「めもこそふたつあれ。ひとゝころを、おやきみとたのみたてまつるわがこには、なかかくはの給。」(国譲の

下、1641—3)

マナコがメになっている以外は『土左』の例と全く同じであり、やはり後に上げる父親(仲忠)の大切さを強調する表現となっている。

『今昔物語集』でも会話文に現れる。

○妻寄リ来テ云ク、「汝ハ弁異キ態<sup>レ</sup>ツ者カナ。目<sup>ハ</sup>二ツ有リ、只<sup>ハ</sup>獨<sup>リ</sup>

有テ白玉ト思ツル我ガ子ヲ斂シテ、」(卷一九・27)

「目」はマナコともメとも読み得る。

4例の間に語句の微妙な相違はあるものの、あとに上げる一つのものの貴重さを強調する表現であり、その点で四例共通するところからみて、既に言われるように<sup>(24)</sup>当時の諺か慣用句的なものであったと考えられる。諺あるいは慣用句としての、会話文におけるこのような広がりとは定着は、漢文訓読語としての面とは別に、マナコの古さと口語的面を、示しているように思われる。ところで、『宇津保』の後の例がマナコではなくメであるのが気にかかるが、話者「かんのおとど」は俊蔭の娘、仲忠の母である。中古のマナコの会話文・心内語では、この例以外は全てが男性によるものであり、その点にもこの語の漢文訓読語としての一面がうかがえるが、この例のみ女性である(地の文では『枕草子』の例がある。『今昔』は読みが未詳)。マナコは、これまで見てきたようにまた後にも上げるように、

動物の目に対して使われたり、恐怖・敵意・嫌悪の対象の目に使われたりするといったマイナス評価の語であった。そのことを考え合わせるなら、慣用句としては4例の共通項から帰納できるように「まなこもこそ二つあれ」であっても、女性がその息子の前で当人の大切さを説いて説得する為に使うには、良い印象を与えないあまり品の良くない言葉であり、また漢文訓読語でもあったため、ここでは同義語のメに置き換えられたのではなからうか。諺や慣用句は基本的には表現が固定しているものであるが、その中の語がマイナスイメージをもつ場合、その語を省略したり類義語に置き換えることは現代でも特に女性などにしばしば見られることである。(これから見て『今昔』の目もメと読めようか。)ところでこの表現には他の例のようなマイナスイメージがない。慣用句としての定着と使用者の広さから、かなり古いものであることが推察されたが、古い段階ではマイナスの意味がなかったことを示すとも考えられ、注意される。

『宇津保』には今まで挙げたほかに2例あり、それらは阿修羅の描写に使われている。

○その山にいたりて見たせば、(略)わりこづくるものあり。かしらのかみをみれば、つる<sup>ぎ</sup>。をたてたるがごとし。おもてをみれば、はむらをたけるがごとし。あしてをみれば、すき・く

はのごとし。まなこをみれば、かなまりのごとくきらめきて、  
(略)木をきりこなす。あすら(阿修羅)いかれるかたちをい  
たして、「(略)」と、まなこをくるまのわのごとみくるべかし  
て、はをつるぎのごとくくひだしていかる。(俊蔭、7-11・

8-2)

俊蔭が木を倒す斧の音にひかれて訪ねた山奥で見た阿修羅の形相  
が描かれている。人にあらざる恐ろしきまでのこの阿修羅の目に對  
してマナコが使われており、やはりこれまでの例の延長線上にあ  
る。

『大鏡』には地の文で上皇に使われた例がある。

○院にならせ給て、御目を御らんぜざりしこそ、いといみじかり  
しか。(略)御まなこなどもいときよらかにおはしましける。  
いかなるおりにか、時々御らんずる時もありけり。(三条院、  
大系)

三条院が目が不自由であったことは様々な文献にみられる(大系  
補注参照)。右例からも分かるようにいわゆる清言であったようである。  
マナコの直前に「御目」とあり、これは冒頭で目が見えない  
ことを客観的に説明するものであるが、後の「御まなこ」は三条院  
の清言であるその目の描写になっており、「きよらかに」とはある  
ものの、後者には明らかにマイナス評価が加わっているのである。

中古のマナコを見終える前に、マナコの複合語であるマナコキを  
見ておくことにしたい。マナコキは目付きの意であるとされるが、  
中古に次のような例がある。再び遡って『篁物語』には、やはり会  
話文に、

○(兵衛佐ばかりの人)「さきに気色あしういひけむ人にや取ら  
すべき。この稲荷にて、まなこめものしげに思へりしものぞ  
や」(日本古典全書)<sup>(26)</sup>

とある。自分の思いを寄せる女性になんとかいい寄ろうとするが、  
その兄・篁が邪魔をする。先だって「けしきあしう」言い、邪魔だ  
てした憎い男(篁)の目付きが「ものしげ」つまり不快そうに思わ  
れた。敵意・憎悪と言えば大袈裟だが、会話文に現れた明らかにマ  
イナス評価の用法である。

また、『枕草子』の「鳥は」の段には、

○鶯は、いとみめも見ぐるし。まなこめなども、うたてよろづに  
なつかしからねど、(四一段、大系)

とあり、人以外の例である点で『日本書紀』『宇津保物語』の例に  
通じ、破線部のように不快・嫌悪の対象になっている。やはり、マ  
ナコと同一線上にある。

『源氏物語』では、薫の大将对してのみマナコが使われている  
(2例。いま諸本異同のある「天眼」(てんげん・てんのまなこ)

を除く。

○なまめとまるところもそひてみればにやまなこひなとこれは今すこしつようかとあるさまさりたれと（横笛、1282—12、

#### 源氏物語大成）

夕霧は、薫に対して「もしうたがふゆへもまことならば」という疑念の気持ちがある。ついそう見てしまふ気持ちが加わるため、そのマナコキは柏木よりも才気ある様とは思われるものの「いま少しきつい」目付きと見てとるのである。そこには、あからさまな嫌悪ではないものの、異腹の我が弟ならぬ不義の子への屈折した心理が投影されていると見るべきであらう。<sup>(26)</sup>

以上、仮名書き散文に現れる一連のマナコ・マナコキを見てきた。<sup>(27)</sup>これらすべてに共通しているのは、明らかにマイナス評価語として使われている点である（「まなこもこそ二つあれ」を除く）。さらに加えるに、そのほとんどが会話ないし心内語での用例である点である（『竹取』2例『土佐』『宇津保』『篁物語』『源氏』2例）。但し、これらの作品を見るうえで『竹取』『土佐』『宇津保』『大鏡』は漢文訓読の影響が著しく、他の仮名書き散文資料と同様に扱うことができない点は注意しなければならない。これらにマナコが現れるのは、漢文訓読語がたまたま仮名文に入り込んだものに過ぎないとも考えられるからである。そのような事例は少なくないから、そ

の可能性をまず考えておく必要がある。

そのような点に注意しながら、漢文訓読文と仮名文との用例の差をもう一度検討してみよう。同じ会話文でも『宇津保』の学生の例や『蜻蛉』の導師の例はマイナスではないから、地の文ではニュートラルで会話文ではマイナスであるという使い分けによる差ではない。偏りのないニュートラルな、しかも法師・博士が使い支配層である男性が使う漢文訓読語が、会話であるいは仮名文の中で使われる場合に限り意味を変え、しかも価値を落としてマイナス用法になるという使い分けも考え難い。このように見えてくると、男性が使っているという共通点はあるが、意味と位相（会話文）との相違から見て、これらは別に扱っておくべきマナコの二面性を示しているものと解釈すべきもののように思われる。この二面性を考慮したうえで、ひとまず、それらを整理すると次のようになる。

#### 一、訓点資料や漢文訓読体の文章中

1、プラス・マイナス評価いずれにも使われ、偏りが無い。

2、黒目に限定されていない。

#### 二、仮名書き散文の文章中

1、会話文・心内語に多く現れる。（その場合男性が使っている。法師・学生が使っている場合は、一に準じて考えられる。）

2、動物や、恐怖・敵意・嫌悪・憎悪・嘲笑などのマイナス感情をもつ対象に使われるマイナス評価の語である。

3、慣用句で使われる。(この場合マイナスの意は認められない。)

4、黒目に限定されているとは言いがたい。<sup>(28)</sup>

用例を見る限り、マナコは黒目ないし瞳に限定されて使われているわけではなかった。総合すると、マナコには従来指摘されている漢文訓読特有語としての面と会話語としての面という一見すると相矛盾するような二つの面があったものと考えられる。これは共時的にはそれぞれ別の位相での実態であったと考えられるが、この二つの面に共通した特徴から見て、通時的にはその背景に一つの流れを見出すことができる。

共通するのは共にマナコの古いことを示している点である。メではなくマナコの方が古辞書や訓点資料で使用され、漢文訓読特有語であるところから見てかなり古いものであることが推察されるが、一方、会話文での慣用句としての定着はかなり古くから使われている語であることを示しているとも考えられる。

メの方がマナコよりも古いと解釈する場合、マナコの先の二面両方が説明されなければならない。いま仮に、マナコの方が古い語形と考えると次のような解釈も可能であるように思われる。目を表す

古い語形として、会話文にも使われるマナコ(ク)があり、初めはマイナスの意はなかった。それはその古さゆえに漢文訓読語としてとられ、一方で慣用句に残った(これらにはマイナスへの偏りはない)。その後何らかの理由によって(ひとつの可能性は新語メの登場によって古い語としておとしめられ)マイナス評価語に下落した。また、メとの併存になったため、意味の衝突を避けて「目の子」という語源解釈が加えられ黒目を表すともとえられるようになった。多くの現象をつないでみるとこのような解釈ができる。

### ●マナク

次にマナクの例を見る。マナクは、近代以降の方言資料以外では、中世のキリシタン資料と近世江戸の滑稽本の二作品に確認できた。まず後者の例から見ると、式亭三馬・楽亭馬笑合作文化八(一八一一年江戸刊の『狂言田舎操』<sup>(29)</sup>)に次のような例がある。

○かん右衛門「隠居殿の馬は。新家の鬼十が我勝氣に使つた物だ。で。眼打潰したア。」

○かん「三絃弾く人は。目が有ちやア弾ねへさうだ。いつでもハア。番毎に盲人だ子。権(注・羽根崎村の権十)「眼が有て見る。三味イ弾く手で。馬ア曳て出らア。」

○権「イヤ志らばつくれても己が眼には佛さまがござらア。」

○同(同助)「(略)三絃も目明だれば眼へ響てわるかんべい

○(見物人)「太夫どんが眼くんねぶるに三絃かぢりどのが性來目ねぶつ居るから。兩言どの。」

冒頭に「所は何國と定ねど。住めば都の片鄙」とあるように、東日本のある農村が舞台で、そこで操り芝居が興行される様子を描いたものである。マナクを使っている話者はすべて土地のものであり、マナコの例はない。マナクをよく使う権十も相手が江戸の俳諧の先生とおぼしき人であると、

○権「イエサ。田舎者の物を志らぬ者の目からは先生さまさ。

のようにメに改めるところを見ると、マナクの方が方言であり、メが丁寧語あるいは江戸語であることを知っていたらしい。用法上特にプラス・マイナス関係なく使われている。東日本のどこであるかは明確にできないが、言語地図の東日本での分布と一致するものとみなせよう。

もう一例は、一五九一年の年紀をもつマノエル・バレットの自筆筆写本いわゆるバレット写本のうち「年中の主日並びに年中の主なる祝ひ日のエワンゼリヨ」に見られる。

○Mata monino manacu no saye fracaxe tamayeba conofito  
xixezaru yoni nado vonfacaray naquto mosu Judeo mo  
ari. (59) (又盲人の眼をやく開かせ給へば、この人死せざる

様など御計らひなきと申すジュデウもあり。)

バレットは一五九〇年七月にイエズス会の宣教師として長崎に着き、一五九一年にこの写本を作り、一五九二年一月には天草のコレジョで日本人生徒にラテン語を教えている。長崎に着いた時、日本語学習のため他の宣教師と共に肥前国大村近くの坂口に送られ、一時大村へ移り、一五九一年の復活祭になって坂口に戻ったとされている<sup>(32)</sup>。一五九二年一月まではそれ以上明らかになっていないが、

Josef Franz schütte S. J. 氏は「この写本は多分大村(坂口または宝性寺)或は天草でできあがったもの」と推察されている。この間、バレットは九州を離れておらず、右のような日本語学習の経緯もあり、この写本に九州方言が反映していることが指摘されている<sup>(34)</sup>。

バレット写本集(前半の七部)には、メは10例マナコは13例見られ、マナクはこの1例のみであるが、筆跡は明確な $\text{u}$ で $\text{o}$ と紛れるようなものではない<sup>(35)</sup>。山田俊雄氏は「manacoの末音節のウ段音化した形」としているが、変形か否かいまはともかく、このマナクは当時の九州北西部の方言形と考えられ、中世末にはマナクが九州で使われていたものと見なすことができる。

## 五 近隣諸語との関係

メ・マナコ・マナクの新旧あるいは語源について別の視点から検



討を試みるために、ここで目を日本の外に移してみることにしよう。マナコの語源に關係して言語学の分野からいくつかの指摘がなされている。筆者は比較言語学でのそれらの指摘に批判的検討を加え得る立場にないものであるが、前節まで見てきたことの問題点をより明らかにするために、ここでそれらの指摘を見ておくことは欠かすことができないように思われる(引用の文献も管見に入ったもののみで、偏りがありはしないかと慮れるものである)。

村山七郎氏は『日本語の研究方法』の中で次のように述べている。

私は *ma|na* を \**mana|na* (≠ \**ma|Fa|na*) の重音省略の結果であると見ます。このようにして生じた *mana* からあたかも、

「目」の本来の語形が *ma* であるかのような錯覚がひきおこされた(のー引用者補う)でしょう。マ「目」という日本語は重音省略によって *manana* から生じた *mana* の誤った分析(*ma·na*)から生まれたと見ます。そして類推によって「露出形」*ne* が逆形成されたのでしょう。こう見ると、日本語のマ「目」は南島諸語の *ma|ta*、台湾諸語の *ma|tsa* と同源であることが結論されるのである。<sup>(37)</sup>

(猶、村山氏以前に単に南島諸語マタとの類似を指摘したものに ついては、氏の著書に言及されている。)

また、川本崇雄氏は『日本語の源流』の中で、日本語の中に見出される南島祖語 \**ma|ta* に遡る単語として、目 (*me*) をあげる。<sup>(38)</sup>

藤原明氏は「上代」日本語とドラヴィダ祖語との比較(人体語)表の中で、上代日本語「*me·ma* 目」(下に「逆成」とあるのは村山氏と同様メがマからの転成という意か)に対してドラヴィダ祖語 \**ma|tal* をあげる。<sup>(39)</sup>

このような指摘がなされているが、各々の説の当否および南島祖語形・ドラヴィダ祖語形とされる語形の間に見られる類似がどのように解釈されているかについては、今はつまびらかにすることができない。ここで問題にしたいのは、いずれの説もメではなくマ(ナ)の方と各語形との対応を唱えている点である。メよりもマナーの方が、いずれかの語と同源となるような古い語形である可能性が高い、と考えられることになる。むしろ、メが逆形成されたのがいつでどのような段階にあった時かということが明らかにならない限り、軽々に判断されるべきではない。しかし、マナーの方が古い語形である可能性が高いとするならば、それは方言分布から解釈した結果と一致することになる。文献資料での例もマナーの方が古いことを否定するものではなかった。言語学からのこれらの指摘は、今後厳密に検討されなければならないことではあるが、メ・マナコ・マナク各語の関係を考察する上で考慮する必要がある。

## 六 言語地図と文献資料などの対照による解釈

前節まで、言語地図によって方言分布を検討し、文献資料によって特に上代・中古を中心に用例を詳しく検討してきた。また、参考として比較言語学からの指摘もみてきた。ここではそれらに見られる共通点をまとめ、ついで相違点を含めた問題点について考察していくことにする。

共通する点は次の点である。

1、メよりもマナー（マナコ・マナク）の方が古いと考えられる。

（言語地図、言語学からの指摘<sup>(40)</sup>）

2、マナコ・マナクは、心ずしも黒目に限定されておらず、目全部をも表して使われていた。（言語地図、文献資料、マナとの対応を説かれる近隣諸語形も目を表す。）

3、マナコは、少なくともある時期はマイナス評価語として使われていた。（言語地図の能登半島付近の報告、文献資料）

4、マナクは、古くは全国のさらに広い領域で使われていたと考えられる。（言語地図、文献資料）

各々の間にこれらの共通点が見られる一方、次のような問題が残る。

1、マナコとマナクはいずれが古いと考えられるか。それぞれの語

の成立をどのように考えるか。

2、マナコは、文献資料では上代から近代までかなり長期にわたってメと併存している。しかし、言語地図では全国にわたるメとの併用とはならず、かなり限られた領域にしか分布していないのはなぜか。

後者については次のように解釈することができる。言語地図のマナコは、メの周辺部（マナクを含めるとそれ以遠）に分布しメよりも古いものと考えられるのだが、L A J の質問文では絵を指して答えてもらうものであるから、マイナス感情が加えられることはなく、言語地図上のマナコの分布はマイナスではなかった古い時代の分布であり（訓点資料もマイナスではない点共通している）、その後マイナスに下落しさらに文章語化していったマナコは言語地図には現れなかったと考えられる。マナコの方が下品であるという報告が能登付近にあったが、そのような報告がメとの境界線付近のマナーにないのは、まだ併存状態になったばかりでマイナス化しきっていない段階だったからであろう。境界線から離れた能登は、併存状態がやや進んでマイナス化しつつあった段階のマナコを留めていると見ることができる。

前者の問題、すなわちマナコとマナクの前後関係を明らかにするには文献資料の例がとぼしい。バレット写本のマナクを言語地図のな

かに位置付けてみると、西日本のマナコよりもさらに周辺部に位置することになる。マナコよりも辺境の東北(言語地図)と西南(文献資料)という分布は、マナコの分布の後マナコが広がってマナクを辺境に押しやったため周囲分布をなしたものであるようにも解釈できる。(マナクからマナコへのウ段からオ段への変化は少なくないし、また、「目の子」の語源解釈(辞書の注「目子」の影響など)が加われば容易に変化も起こり得よう<sup>(41)</sup>)。一方、オ段からウ段への変化も多く、それが東北と西南の両端で偶然起こることも充分考えられることである。

これまで見てきたところをまとめてみるなら、メよりもマナコの方が古いと言いつけるほどの確証は得られないものの、逆にメの方が古いとするには言語地図・文献資料・近隣諸語との関係におけるいくつかの問題が残ることが指摘できよう。

以下では、言語地図を再びとりあげ、どのような解釈の可能性があるかを述べてみたい。

## 七 「東西対立分布西日本拡大型」の成立過程

メ・マナーの東西対立分布は、その境界線が関東・東北を通る西日本優勢型の分布をなしている。いわゆる糸魚川・浜名湖の東西中央境界線から隔たったこのような分布境界線が、どのような過程を

経て形成されたものであるか、その成立過程を考えながら改めて分布を検討してみることにはしたい。

まず、境界線の日本海側を見ると、海岸線に沿ってメが北に伸び、新潟・山形県境付近まで北上している。このことから見て日本海沿岸の分布は関東などのそれとは別に西日本から海運によってもたらされたものであって、それほど古い時代のものではないと考えられる。関東における分布を見ると、茨城・栃木から福島にかけてメの分布がやはり北上している。これは、日光街道・奥州街道に沿った北上と見なすことができ、新しい時代の伝播であろう。中央境界線のやや西側になるが、富山・石川付近にもマナコが少なからず分布している。これは西日本にもあったマナコがメの拡大のために、中央境界線付近まで押しやられたものと考えられる。また、糸魚川・浜名湖線付近を見ると、長野の西側県境に沿って静岡までマナコが数地点並んでいる。これらの形づくる境界線上の南北のマナコの残存地帯は、ひとつ古い段階においてこの中央境界線までマナコがあり、そこでメ・マナーが東西対立をなしていた際の名残であろう。メ・マナーの境界線は、LAJ第102図「旋毛」における東日本のツムジとマキメの境界線に極めて類似していた。中央境界線付近にマキメが残存しているのもマナコと共通している。関東・東海に分布するツムジは、上方から伝わっていたものが近世になって江戸文化

が台頭するようになってから、江戸中心に拡大したものであると考えられている<sup>(42)</sup>。分布の類似から見て、関東・東海のみも同様に新しい時代の拡大である可能性が高い。

ところで、メの東西日本への拡大状態を中心であった奈良・京都・大阪付近から測ると、西は南西諸島まで及んでいるのに対し、東は関東東北部までしか及んでいない。中心を一つとして単純に比較するなら、東への距離が短く、伝播が明らかに遅いことになる。このような伝播方向による拡大距離の差を、各方向とその伝播時期による伝播速度の差として考える向きもあるが、単純に伝播速度を割り出す前に、中心地の江戸への移動や多くの事例に確認される「伝播圏の縮小現象」<sup>(44)</sup>を考慮した上での距離と年代(時間)の算定が必要であろう。

境界線や分布の特徴および「旋毛」との類似を総合して見ると、メの東日本での拡大は比較的新しい時代のものであり、古い段階においては中央境界線上の東西対立をなしていたものと考えられる。そして、これまでの考察とあわせて総合的に判断するなら、「目」の変遷はおよそ次のような段階を経てきていると推定することができる(図2参照)。

最初の段階(Ⅰ)において、東西日本にマナーの分布があり、次の段階(Ⅱ)において西日本にメが伝播・拡大し、中央境界線を境

図 2

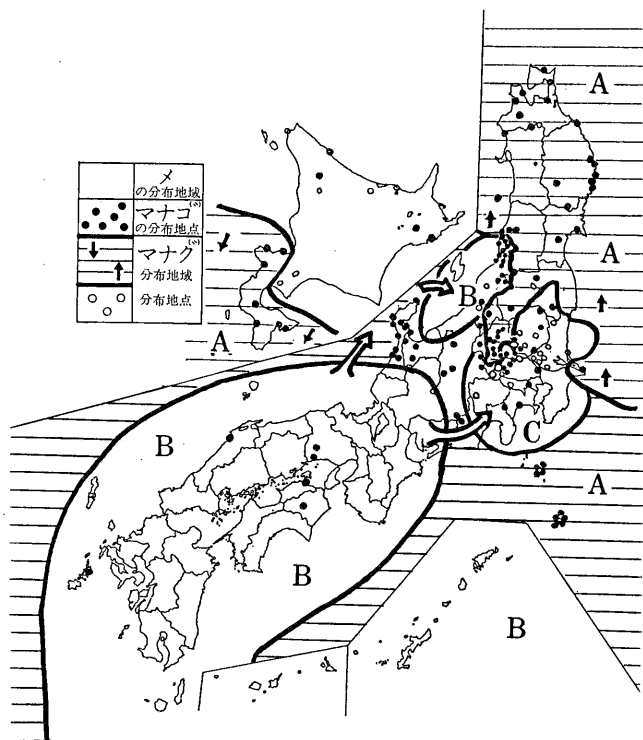
西	東	分布層	段階
マ	ナ (コ)	A	I
メ		B	II
	メ	C	III
	メ	(D)	IV

としてメ・マナーの東西対立を形成(厳密にはこの段階においては西日本の辺境部にマナーがかなり残存していたものと考えられる)、次いでメが東日本(江戸)に伝播し(Ⅲ)、江戸を中心として東日本で拡大(LAJ)の分布はその拡大途上のすがた、それがやがて現代共通語として全国を覆うようになったもの(Ⅳ)と考えられる。

そして、このような変遷過程を経たとするなら、東西対立分布西日本優勢型は、通時的には「西日本(語形)拡大型」と位置付けることができる。

メ・マナーのような西日本優勢型の対立分布には、他にLAJの第187図「畦畔」におけるクロ対アゼ、第270図「灰」におけるアク対ハイがある。これらの分布上の共通点は、「目」のマナーの場合と同様、いずれも東日本語形(クロ・アク)が西日本の辺境部(南西諸島・九州あるいは四国南西部)にも分布していることである。また、

図 3 &lt;目&gt;の言語地図



国立国語研究所編『日本言語地図』第110図により作製

### 結び

仮名書き散文に現れた、漢文訓読特有語の例として扱うにはあまりに性格を異にする一連のマナコと言語地図とを一つのよりどころとし、とぎれとぎれの解釈を縫い合わせて一本の推論を編んでみた。マナコへの疑問から生まれた一つの可能性を述べてみたにすぎないものであるが、古代において併存する同義語(類義語)の背景に、このメ・マナコの場合と同様の問題があり得ることを考えておく必要がある。

注(1) 例えば、馬瀬良雄「東西南方言の

対立」(『岩波講座日本語11 方言』、

昭和52・11)には、『日本言語地図』

における東西対立方言の13本の境界線が示され、徳川宗賢『日本語の世

界8 言葉・西と東」(昭和56・10、中央公論社)には同じく28本の境界線が、同『日本言語地図』からみた方言の東西対立・概観」(『現代方言学の課題 第1巻』、昭和58・6、明治書院)には、同じく25本の境界線が示されている。

文献資料において共通しているのは、やはり両語形が既に古代において同義語ないし類義語(アクは灰汁の意)として併存している点である。これらの分布の成立過程も、メ・マナコと共通した背景をもつものと考えられる。<sup>46)</sup>

- (2) 方言分布の成立過程についてはかつて述べたことがある。拙稿「全国方言分布の成立過程における四つの層」(昭和62年国語学会秋季大会(岐阜大学)発表要旨集)、同「〈庭〉の変遷における方言分布の四つの層」(『文化』51—3・4、昭和63・3)参照。
- (3) いま一例として『時代別国語大辞典上代篇』を引くと、「マは目、ナは連体格助詞。目||ナ||子という語源から考えても、また和名抄などの説明からも、本来は黒眼を指すが、広く眼全部をいう。」とある。
- (4) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(昭和38・3、東京大学出版会)三五〇頁。同『平安時代語新論』(昭和44・6、東京大学出版会)五八四頁。
- (5) 築島裕『平安時代語新論』五八五頁。
- (6) メとマナコ(マナクを含む)の境界線を示したものに注(1)の文献があるが、いずれも本稿とは多少の出入りがある。それゆえ、境界線を引くにあたっては注(1)の文献のほか、第102図を参考にした。「旋毛」については、小林隆「古語ツムジの復活——みやこの移動と名称の変遷」(『言語生活』423、昭和62・3)があり、ツムジ・ツジ・ギリギリの三語が取り上げられているが、マキメ・ツムジの関係についての言及はない。「旋毛」と極めて類似する分布をなす図に第256図「旋風」がある。マキメ・ツムジの関係を「旋風」のマキカゼ・ツムジカゼに照らして考えるに、方言分布の上では東北のマキメが関東のツムジよりも古い語形であると考えられる。
- (参照、拙稿「旋風」の言語地理学的解釈——複雑分布の処理を通して——)(『国語学研究』26、昭和61・12)、拙稿「〈旋風〉の変遷における方言分布の四つの層——古代語彙の二系列——」(『フェリス女学院大学紀要』23、昭和63・3)。メ・マナコ(ク)の新旧に関係して注意される。
- (8) 例えば、前田富祺『国語語彙史研究』(昭和60・10、明治書院)二三三頁及び八三七頁参照。そこでは特に上代から中古・中世にかけて多いことが指摘されている。
- (9) 築島裕『平安時代語新論』(昭和44・6、東京大学出版会)一四一頁の写真による。なお、且の次字「頁」の偏が不鮮明で、築島氏は「須」とされたが、『篆隸萬象名義』第一帖「睛」の注を参照し、「頂」とする。
- (10) 注(9)の文献、三三七頁。また、中田祝夫『改訂版古点本の国語学的研究 総論篇』(昭和54・11、勉誠社)九〇五頁では「眼睛」は「眼睛」とある。
- (11) 中田祝夫『改訂版古点本の国語学的研究 総論篇』九一九頁。
- (12) 大坪併治『訓点資料の研究』(昭和43・6、風間書房)一七一頁。
- (13) 築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 訳文篇』(昭和40・3、東京大学出版会)の訓み下し文による。
- (14) 門前正彦「立本寺蔵妙法蓮華經古点」(『訓点語と訓点資料』別刊第四、昭和43・12)一二六頁下。

- (15) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』六〇三頁。
- (16) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『和泉往来 高野山西南院藏』(昭和56・12、臨川書店)
- (17) 小林芳規「仁和寺藏秦中吟延慶二年書写加点点本」(『訓点語と訓点資料』41、昭和45・6)
- (18) 宇津保物語研究会編『宇津保物語 本文と索引 本文篇』(昭和48・3、笠間書院)
- (19) 高知大学文学部国語史研究会編『栄花物語 本文と索引 本文篇』(昭和61・1、武蔵野書院)
- (20) 小林芳規『法華百座聞書抄総索引』(昭和50・3、武蔵野書院)
- (21) 神原邦彦・藤掛和美・塚原清編『今鏡 本文及び総索引』(昭和59・11、笠間書院)
- (22) 小林芳規・神作光一・王朝文学研究会『梁塵秘抄総索引』(昭和47・9、武蔵野書院)
- (23) 図書寮本『日本書紀』には、「其雷<sup>カミヒカリヒノメキ</sup> 虺<sup>マナコ</sup> 目<sup>メ</sup> 精<sup>カハヤ</sup> 赫<sup>カハヤ</sup> 一々<sup>ヒトヒト</sup>。天皇畏<sup>オソホシ</sup> 蔽<sup>カサヘ</sup> 目<sup>メ</sup> 一<sup>ヒト</sup>」(雄略紀194)とある(参照、石塚晴通『図書寮本日本書紀 本文篇』(昭和55・3、美季出版))。また、前田本『日本書紀』には、「其雷<sup>カミヒカリヒノメキ</sup> 虺<sup>マナコ</sup> 目<sup>メ</sup> 精<sup>カハヤ</sup> 一々<sup>ヒトヒト</sup>。天皇畏<sup>オソホシ</sup> 蔽<sup>カサヘ</sup> 目<sup>メ</sup> 一<sup>ヒト</sup>」(雄略紀166、声点略)とある(石塚晴通『前田本日本書紀院政期点(本文篇)』(『北海道大学文学部紀要』25—2、昭和52・3))。

- (24) 日本古典文学大系『土左日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』同『宇津保物語』の当該箇所頭注参照。ちなみに、前者では、「当時の諺か、流行語かであろう」とある。
- (25) 底本「まならひ」とあるを諸注釈書「まなこゐ」の誤写ととるによる。日本古典全書、小久保嵩明『簞物語 校本及び総索引』(昭和45・11、笠間書院) 参照。
- (26) 『源氏物語』の薫に使われたもう一例は次のものである。

「この君いとあてなるにそへてあい行つきまみのかをりてゑかちなるなとを『いとあはれ』とみ給。思ひなしにやなをいとうおほえたりかし。たゞいまなからまなこゐのゝとかにはつかしきさまもやうはなれてかをりおかしきをさまなり。宮はさしもおほしわかつ、人はたさらにしらぬことなれは」(柏木、1251・13)

表面上はマナコキ以外のところにひとつとしてマイナスの描写はない。注意深く見てみると、マナコキの直前と10行ほど後(「いと何心なう物語りして笑ひたまへるまみ口つきのうつくしきも」)に同義語マミ(目見)が、あたかもその対照を浮き立たせるかのように同じ薫に対して使われているのが目を引く。そのマミの2箇所はともに語り手の薫の描写なのに對し、マナコキの部分は波線で示したところからもわかるように源氏の心内語になっている。「思ひなしにや」と柏木を心に浮かべて見る薫の目は、源氏にとっては、やはり我が子ならざる我が子のマナコキでしかなかったことを示すものではないだろうか。この「思ひなしにや」は本文の方に引い

た夕霧の心内語の「なま目止まるところも添ひてみればにや」と共通する。共にマナコキの直前にことさら柏木のことを喚起させているのは偶然ではなからう。式部はマナコキを使うことの効果を確かに知っていた。『源氏物語』のマナコキには事情を知るものの屈折した心理が投影されており、その負の世界を内包したまま用いられているのである。(また、不義の子にたいしてマナコキを使った例は『いはでしのぶ』(巻六)にも見られる。(小木喬『いはでしのぶ物語本文と研究』、昭和52・4、笠間書院、六一三頁) 参考文献、清水好子「薫創造」(『文学』、昭和32・2)。鈴木日出男「薫大將」(『源氏物語講座』四、昭和46・8、有精堂)。後藤祥子「薫像試論——出生・道心・結婚観——」(『日本文学』、昭和50・11)。日向一雅「闇の中の薫——宇治十帖覚え書」(『東京女子大学論集』29・2、昭和54・3)。藤井貞和「『思い依らぬ隈な』き薫」(『源氏物語の始源と現在』、昭和55・5、冬樹社)。この箇所については三田村雅子氏に草稿を御一読戴き多くの御教授をたまわった。深謝申し上げます。

- (27) 中世以降のマナコは、次例のように中古までの用法を引き継ぎつつ、しだいに文章語の性格を帯びていく。(漢文訓読体)「桃顔露にはころび、紅粉眼に媚をなし」(平家)。(マイナス評価)「いきたる人のまなこの様に大のまなこどもが千万いできて」(平家)「寝乱れ髪の際より、恐しげなるまなこしばたゝき」(義経記)。

- (28) 中世の例であるが次の一例はマナコが黒目部分を表し得た

ことを示している。「この法師、あかきまなこなる目のゆゑしくあしげなるして」(『宇治拾遺物語』)

- (29) 『帝國文庫 滑稽名作集下』(明治27・7、博文館)

- (30) キリシタン文化研究会編『キリシタン研究 第7輯 別冊』(昭和37・3、吉川弘文館)

- (31) キリシタン文化研究会編『キリシタン研究 第7輯』(昭和37・3、吉川弘文館)

- (32) Josef Franz schütte S.J. 「ヴァチカン図書館所蔵バレット写本について」(『キリシタン研究 第7輯』)。また、土井忠生「ヴァチカン文庫蔵バレット書写の文書集」(土井忠生『吉利支丹文献考』(昭和38・1、三省堂)) 参照。

- (33) 注(32)シュッテ氏論文。

- (34) 下村泰子氏は「コリヤード刊『懺悔録』『日本文典』の用語の地域性——「別」という語の表記から考察する——」(『高知女子大國文』4、昭和23・6)の中で、キリシタン資料の「別」の表記「bet」と「bechi」を比較し「この写本に表記されている『bechi』の地域性を考えてみると、この『bechi』は『bet』と違って非常に九州方言の要素が濃いといえるのである。」とする。(ただし、氏はバレット写本「クルスの物語」を資料とし、そこではすべて「bechi」とあるとするが、「クルスの物語」の部分にはベチは一例もない。『キリシタン研究 第7輯』を資料としたところからみて、「クルスの物語」でそこに収められた7部全部を代表させて呼んだものか。他の6部にはベチ15例・ベチジン(別



(人) 3例・ベチニン(別人) 1例のベチがある。

(35) バレト写本の表記・語法については次のものを参照した。

福島邦道氏の新刊紹介『国語学』51、昭和37・12、森田武「キリシタンの日本語学習——マノエル・バレトの注解を中心に——」(『国語教育研究』8、昭和38・12)、鎌田廣夫「キリシタン語法覚書——バレト写本集から——」(『日本文学論究』24、昭和40・3)、松岡洸司「キリスト教の伝来と宗教用語——バレト寫本・聖經直解を中心として——」(『キリスト教文化研究所紀要』3、昭和59・3)、同「『バレト写本』と『聖經直解』の対照と語彙」(『キリシタン研究』25、昭和60・6、吉川弘文館)。

(36) 前掲『キリシタン研究 第7輯』の「本文の翻字」(山田俊雄氏担当)脚注参照。

(37) 村山七郎『日本語の研究方法』(昭和49・10、弘文堂) 一五頁。同六四頁には「このマナ mana は南島祖語 \*maŋa からの發達と見ることは不可能ではありません(おそろく \*maŋa > maŋa > maŋa > mana。\*maŋa の前鼻音化形からマナの發達を推定するのです)。」とある。また、同『日本語の誕生』(昭和54・3、筑摩書房) 一九五頁参照。

(38) 川本崇雄『日本語の源流』(昭和55・10、講談社、六二頁)。また、川本崇雄「日本語と南島語の間の二つの音則」(馬淵和夫編『世界の言語学者による論集 日本語の起源』、昭和61・7、武蔵野書院)では、基礎語彙の「比較語彙表1」で eye の頁に上古日本語 ma- に対して南島祖語 maCa、pra

イタ祖語(ソロモン) eaa をあげる。(川本氏には私信にて御懇切な御教授をたまわった。深謝申し上げます。)

(39) 藤原明『日本語はどこから来たか』(昭和56・10、講談社) 五七頁。

(40) 第五節で見てきたことのほかに、文献資料における次の点も考慮される。メ・マ・マナの複合形を見ると、古代に於ては、マナコ・マナザシ・マナカヒ・マナブタ・マナジリ・マナカブラ・マナアタリなど、マナとの複合形が特に多い。中でもマナブタ↓マブタ、マナカブラ↓マカブラ(↓メガシラ)、マナジリ↓メジリ、マナアタリ↓マノアタリのように、後世マナからマ・マ(の)あるいはメへと変化・定着した類用語が少なくない。古形態の複合語への残存としてとらえるなら、ここでもやはりマナ(マナナとるか別として)の古さが問題として浮かび上がってくる。

(41) マナクロ(目黒)√マナクの可能性が考えられるものの、ク(ナク)の問題は残る。(ところで、マナコはメより以前に目を表した可能性が考えられたが、もしそうであるとするなら黒目ではないのだからことさら「之子」と説明的に造語する必要性はなかったことになる。村山七郎氏は「マナ・ナ・コ」の重音省略ととして「之子」説を残すが、目の古形をマナとされた。「コ」は、今でも東北地方などで雪ッコ・雀ッコなど小さいものの親愛の意を添えて使われる指小の接尾辞と同様のもので、上代にも鮎に対する「年魚小」(万葉集三・475)「阿由故」(同五・859)の例がある「小(子)」と

考えることもできる。このコの場合、必ずしも前にナ（ノ）を必要としない。もし目がマナであり得るのなら、マナコは「マナ+コ（小・子）」と解釈することもできようか。一方、村山氏は可能性は低いとしてしりぞけるが（『日本語の誕生』一九六頁）、マタの第二音節の消滅によってマが生じた可能性も考慮される）。

(42) 小林隆「古語ツムジの復活——みやこの移動と名称の変遷」『言語生活』423、昭和62・3)

(43) 徳川宗賢「ことばの地理的伝播速度など」(『服部四郎先生定年退官記念 現代言語学』、昭和47・3、三省堂)

(44) 注(2)、注(7)の拙稿参照。

(45) マナコ(ク)が土着の語であり、メが、新しい語であるとすれば、前者がマイナス評価をうけた理由が説明できよう。

(46) 東日本優勢型にも同様(逆のボタン)の段階が考えられる。中央拮抗型も同様の背景を持つと考えられるが、それらについては機会を改めて述べることにしたい。

# 〔附記〕

佐藤喜代治博士には、本稿に対しても御懇切な御教授を賜わり、いくつかの点で加筆することができた。御助言を充分生かせぬままに未熟な点を多々残したのは、筆者の浅学非才による。深く感謝申し上げるとともに、先生の今後益々の御発展と御健勝を祈り上げます。

(一九八八・九・二一、追記)  
(本学専任講師)